

海洋人間学 2025 年度 成果報告（自己評価）

逗子開成中学校・高等学校 海洋教育委員会

1. 海洋人間学の指導目標
2. 中学3年生「遠泳実習」報告
3. 中学「ヨット帆走実習・ヨット製作及び海洋関連講義」報告
4. 中学「海洋人間学」×「総合学習」報告

1. 海洋人間学の指導目標

中学1年

- ・ ヨット帆走実習を通じて、海洋（風や波）を体感し、そこで得られた生徒の個人的体験を生徒間で共有し、海洋に対する多様な捉え方を学ぶ。
- ・ ヨットの 仕組みを学ぶことにより、海洋で生きるための道具の意味を理解する。
- ・ 風や波に関する地学的、物理学的 知見を学ぶことで、海洋（自然環境）を理解する。
- ・ ヨット帆走実 習での海洋体験と海洋に関する知識を結びつけ、海洋を多角的に 理解する。

中学2年

- ・ ヨット帆走実習を通して、風や波の動きを把握しながらヨット帆走技術を高める。
- ・ 地球規模変動による生物の生態への影響や沿岸地形への影響など、現在の海洋に関する問題を知ること、海洋に関する学問的関心や海と人との関係について関心を持つ。
- ・ ヨット帆走実習で体感した海洋把握と、講義を通して得た海洋に関する知識や関心を結びつけることで、海洋に関する理解を深める。

中学3年

- ・ 遠泳実習において ヨット帆走とは異なる側面から海を体感し、ヨット帆走実習と合わせて人間にとっての海洋のあり方を考察する。
- ・ 深層海流循環など海洋力学に関する問題を学ぶことで、海洋に関する学問的関心や海洋と人間の関係について関心を高める。またその関心をもとにさらなる探究活動へと促す。
- ・ 総合学習において、中学3年間の海洋人間学の集大成として、これまで学んだ海洋に関する知識や考えを活用し、人間と海洋のあり方を考察できるようにする。

2. 中学3年遠泳実習報告

1. 実施目的

1. 長距離を泳ぐ事で、水への自信を持たせ、逞しい心と体を育てる。
2. 励ましあって泳ぐ事で、他人への思いやりと協調性を育てる。

2. 実施概要

○期日：令和7年7月3日（木）

○場所：逗子海岸

○参加人数：生徒260名、サポート（体育科12名・学年教員10名・ライフセーバー6名・水泳部・ヨット部）

○方法：①3団編成（各団5列縦隊で泳ぐ） ②時間約50分 ③距離約1.5km

○結果：260名完泳



- ・中1 → 生徒全員が平泳ぎで25m泳ぐことができるようになる
※泳力別（A班～C班）に指導を実施している
- ・中2 → 平泳ぎで25mを速く泳ぐことができるようになる
全員がクロールで25m泳ぐことができるようになる
- ・中3 → 顔上げ平泳ぎができるようになる

学年	授業	内容	補習	備考
中1	週3回+1回	クロール・平泳ぎ	夏休み4日間（前期と後期の2回）	水泳授業は全てTT、週に1回は体育科12名で指導
中2	週3回	平泳ぎ・顔上げ平泳ぎ	夏休み4日間（前期と後期の2回）	
中3	週3回	顔上げ平泳ぎ	遠泳2週間前から放課後・朝に週2回	海練習も3回実施

3. 生徒の成果

【遠泳後のレポートより抜粋】

- ・3年間の水泳と遠泳を通して、諦めずに最後までやり切るという気持ちを持つことができた。
- ・苦手なことでも頑張れば達成できると思った
- ・水泳部の先輩方に応援してもらい励まされた。
- ・遠泳の途中、疲れて気持ちが落ちているところで声を出してみんなで元気を出し合って、最後まで泳ぎ切ることができた。
- ・終わって見たらあっという間だった。もっと泳ぎたいとも思った。

【中 1 水泳授業前のアンケートより抜粋】

- ・泳ぐことが苦手なので頑張りたい。
- ・スイミングクラブに通っていたので、楽しみです。
- ・泳げるけど、平泳ぎはやったことがないので不安…
- ・早く中 3 になって遠泳をやってみたい。

4. 自己評価

遠泳実習の目的は生徒のレポートを見て分かるように概ね達成できたと感じる。水泳授業を中学 1 年生では週に 4 回、中学 2・3 年生では週に 3 回行うことは生徒たちの心身を健康で豊かな身体に成長させてくれる。そして、遠泳本番では隊列を乱さぬように泳ぐことで仲間への気遣い・協力が必須となり、協調性を育むことができた。水泳授業・遠泳実習は中学生の心身の成長を促すのに有効であると感じた。今後の課題としては、水泳や遠泳の授業以外のところで、海洋教育とのつながりを作っていけるかということだと考える。他教科と絡めて、海洋生物について研究する等、考えていきたい。

3. ヨット帆走実習・ヨット製作及び海洋関連講義報告

1. 指導目標

①ヨット帆走実習

・自分でやり遂げる力と協働する力、自然との共生

本校で実習に使用しているヨットは一人乗りの船として設計されている。ほぼ全員がヨット帆走未経験であるが、生徒は自らの五感を頼りに船を操作し短い時間ではあるが、たった一人で航海を成し遂げる。このことは未知の事象、問題に対して自身でやり遂げる力を育成している。他方、一人乗りの小型ヨットでも陸上では複数の生徒の協力なしでは、移動や準備を行うことはできない。運営補助員として参加するヨット部員も含め他者と協力して行事に参加、運営することで協働する力をも育んでいる。

また、どんなに準備を整えても風が吹かなければヨットは帆走することができない。同時に自分の身は自分で守るといったアウトドア活動の基本を体験する。このような活動を通じて海の美しさを感じるとともに、人の力ではどうにもならない自然への畏敬の念を抱くことで、かけがえのない自然と共生する意識を学ぶ。

②ヨット製作

・責任と協働、人間の知恵と工夫

ヨット製作では3隻のヨットを学年全員で分担作業をして製作する。小さなネジ一本でも締め方がいい加減であれば浸水の危険性があり、塗装のひと塗りの失敗が仕上がり台無しにする。生徒はヨット製作を通じ個人の責任と共同作業の大切さを学んでいる。

本校のヨットはその構造の大部分をサステナブルな素材である木材を用いて制作されている。作業を通じて石油化学製品が環境に及ぼす影響や森林資源の問題に触れる機会をも提供している。

ヨットそのものが先人から受け継いだ知恵の塊でもある。テコや滑車、揚力の不思議さ等、生徒は机上の理論だけでなく実際に体験することで、その面白さや工夫を学んでいる。

③海洋関連講義

・海を通じた多様な学び

海洋関連講義の基礎として「帆走理論」、「ロープワーク」、「海の安全知識」、「海の環境」の4つの分野について、中学1年の後期に授業を行っている。いずれの内容も導入レベルの域を出ないが、海やヨットに関連する様々な問題について自分事としてとらえることで、将来学びを立てるときの糸口やヒントを提供する。

2. 実施概要

① 2025 年度 OP ヨット帆走実習一覧

No	実施日	学年・クラス	参加生徒数	出艇数	備考
1	4 月 21 日 (月)	中 2ABC	121	34	北東強風、小分けの出艇にするのにやや判断が遅れた
2	4 月 30 日 (水)	中 2DEFG	162	40	4 / 17 日分の順延
3	9 月 22 日 (月)	中 2 EFG	121	33	
4	9 月 24 日 (水)	中 3 BCD	116	30	9/16 日分の順延
5	10 月 2 日 (木)	中 1EFGH	139	35	
6	10 月 3 日 (金)	中 1ABCD	139	36	
7	10 月 8 日 (水)	中 3 AEFG	157	39	9 / 17 日分の順延
8	10 月 14 日 (火)	中 2ABCD	162	39	9 / 18 の順延

□帆走実習の様子

中学 1 年生の後期の技術の授業において 3 隻のヨットを制作し 3 月末に完成、4 月末中 2 学年で進水式を行っている。後期は中 1～中 3 の各学年を前後半に分けて帆走実習を行った。特に中 3 はリレー方式のレースを行っている。

② 2025 年ヨット制作授業について (中 1)

・2025 年 10 月より 2026 年 3 月にかけて 3 隻のヨット (No239～241) を製作した。製作艇数が 3 艇に変更されたことから、本年度より製作と授業のハイブリッド方式で授業を行っている。各クラスを半分に分け授業班、製作班を一時限の中で入れ替える。授業内容は昨年度まで海洋講義で取り扱っていた「素材と手工具」について。

③2025 年海洋関連講義について 中 1

・海洋関連講義として「帆走理論」、「ロープワーク」、「海の安全知識」、「海の環境」の 4 つの分野について後期に授業を行った。

3. 生徒の成果

- ・本年度も実習に対して参加意識の向上が見られた。中学 1 年生にとってヨット帆走は初めての体験となるが、生徒は真剣に取り組み、楽しんで実習に参加している様子である。以降中 2、中 3 と学年が上がるのに伴って帆走技術の向上が感じられる。具体的にはより難しい風向、風力に対応できるようになる。陸上での待機時間についても向上が見られるが、手持ち無沙汰になってしまう点は否めない。なので工夫をする必要を感じている。
- ・海洋関連講義では技術、地理、地学、歴史など教科横断的な話題に触れる機会も多く、以前に学習した知識について、海的话题を通じて再認識させる効果もあった。
- ・本年度も基本的な帆走技術について知識の定着は芳しくない。具体的には簡単な結び方や基本的な乗艇姿勢がとれない生徒が散見される。

4. 自己評価

ヨット製作及び関連講義については、結果的に中 1 学年に集中して実施されているが、今後本校の海洋教育プログラムに取り組んでいく上で重要な導入部分を担っている。同時にヨットは教材として多くの能性を秘めており、「作る」、「乗る」といった実体験を通じて得ることのできる学びは、生徒にとって貴重な機会となっている。今後も「合教科」での取り組みや、「自然との共生」への動機付けをさらに進めていくとともに、発展的な学習につなげていきたい。

4. 「海洋人間学」 × 「総合学習」 報告（海洋人間学自己評価）

1. 実施目的

- ① 探究活動を本格的に行う際に必要となる、学校図書館の基本的な使い方を理解する。【知識・技能】
- ② 「（海に関する）探究テーマを定め」「関連する情報を調べ」「その成果を他者にわかるようまとめる」という、探究活動の基本的な流れを実践し理解する。【知識・技能・思考・判断・表現】
- ③ （中1）土曜講座として実現する可能性のある企画を立てることを通し、自身の学びと学校参加が関係することを理解する。【学びに向かう力・人間性】
 （中2）ディベートに取り組み、意見を言う力を高めながら、他者の意見を聞き、自分の考えを深める。【意見を言う力・情報を分析する力】
 （中3）中1、中2で学んだ探究活動の基本的な流れを利活用し、本中学校の海洋人間学のまとめとして「理想の水族館の企画」を行い、発表する。【情報の整理・分析、まとめ・表現】
- ④ 今後の学校生活の中で、逗子特有の環境である海を「体験の場」としてだけではなく、「探究の場」としても活用できることを理解する。（学校の特色活用・教育課程特例校）

2. 実施概要

- (1) 中学1年生、2年生、3年生総合的な学習の時間を利用して実施
 （背景青色が海洋人間学のプログラム）

2025 年度

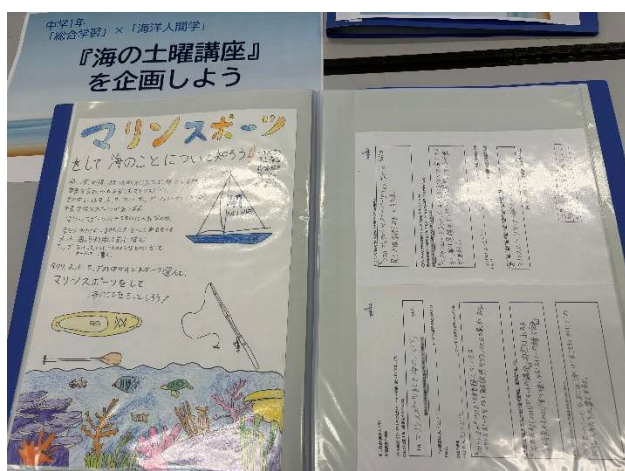
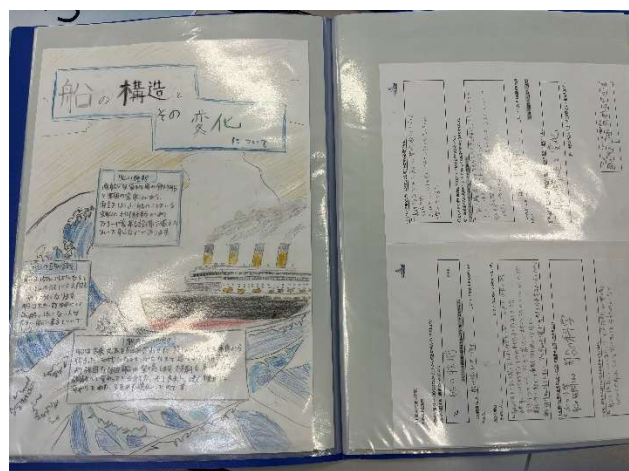
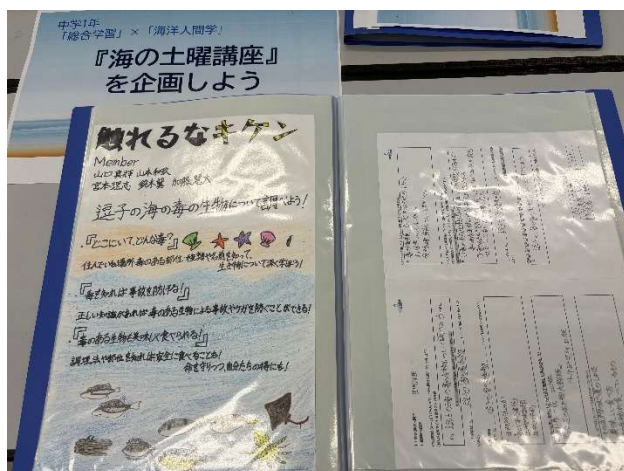
	中 1	中 2	中 3
前期	『海に関する土曜講座』を企画する	災害についての探究	『理想の水族館』を企画する
後期	探究入門	ディベート『日本の水族館及び動物園を廃止するべきである。』是か非か。	高1 総合探究の準備

(2) 内容

- ・ 中学1年：『海に関する土曜講座』を企画する」 探究的な学習プロセスを踏むながら、グループで海の土曜講座を企画し、宣伝ポスターを製作、クラス内でグループ発表を行い開成祭展示をした。
- ・ 中学2年：ディベート 「『日本の水族館及び動物園を廃止するべきである。』 是か非か。」 探究的な学習プロセスを踏むながら、グループで情報を集め、論題についてグループ対抗でディベートを行った。クラス内予選から学年大会へ数時間をかけて実施した。
- ・ 中学3年：『理想の水族館』を企画する」 探究的な学習プロセスを踏むながら、グループで理想の水族館を企画し、研究（企画）ポスター・発表用スライド・模型などを製作、開成祭での発表を行った。

3. 生徒の成果

- ・ 中学1年：『海に関する土曜講座』を企画する」宣伝ポスター



- ・ 中学2年：ディベート『日本の水族館及び動物園を廃止するべきである。』是か非か。」
クラス内大会で勝ち進んだチームが、学年大会へと進出し、クラス対抗でディベートを行いました。



・中学3年：『理想の水族館』を企画する

開成祭（本校文化祭）において、ポスター発表とパワーポイントを使ったスライド発表で、理想の水族館の企画を発表した。



4. 自己評価

(1) 成果

「海洋人間学×総合的な学習の時間」を合教科型で位置づけ、中1から中3までを見通した学習プログラムとして体系化し、一定の継続性をもって実践できた。企画立案（中1）→根拠に基づく議論（中2）→探究の統合的発表（中3）という段階構成により、学年進行に応じて探究の質を高める流れを設計できた。

(2) 課題と改善点

今年度は、中1～中3までを見通した「海洋人間学×総合学習」の枠組みを整え、継続的に実施できた。一方で、活動が資料調査とまとめに寄りやすく、課題解決につながる問いの設定や、問いを更新しながら深めていく学びが十分にならなかった。その結果、生徒にとって自分が解決したい課題として捉えにくい場面があった。次年度以降は、評価方法の整備に先立ち、まず学習内容そのものを見直す。現場（人・場所・実物）に触れて気づいたことを出発点に、課題を具体化していきたい。特に中3の水族館探究は見直しの柱とし、見学・取材を踏まえて展示や学習プログラムの案をつくり調べて終わる企画から一歩進めたい。